

「雷桜」



2010（平成22）年11月27日鑑賞＜TOHOシネマズ梅田＞

監督：廣木隆一

雷（遊、庄屋の一人娘）／蒼井優

清水齊道（御三卿清水家の当主）／岡田将生

瀬田助次郎（齊道の家臣、雷の兄）／小出恵介

田中理右衛門（雷の育ての父）／時任三郎

田所文之進／池畑慎之介（ピーター）

榎戸角之進（清水家の御用人）／柄本明

たえ（雷の母親）／宮崎美子

2010年・日本映画・133分

配給／東宝

＜日本版ロミオとジュリエットだが・・・＞

シェイクスピアの名作『ロミオとジュリエット』を基にした物語の代表は、何といてもミュージカル映画の最高峰『ウエスト・サイド物語』（61年）だが、本作は日本版の『ロミオとジュリエット』。私は今NHKラジオ講座で、中国版『ロミオとジュリエット』と言われている趙薇（ヴィッキー・チャオ）と陸毅（ルー・イー）主演の『初恋の思い出（情人結）』（05年）（『シネマルーム21』117頁参照）を勉強しているが、これは親同士が仇ながら同じ公務員宿舎に住む男女の純愛だから原作に近い。しかし、本作は時代を徳川時代に設定し、身分違いの恋といういかにも日本的な要素で設定しているから、原作とはかなり違っている。そのため、山の娘・雷（蒼井優）が白い馬を疾走させる颯爽たる乗馬姿や、かつて「DESIRE」で第28回日本レコード大賞を受賞した中森明菜のあっと驚く和服姿と同じような雷のオリジナリティあふれる和服姿が印象的だが、ストーリー的にはイマイチ現実感がない。

美人には不自由しないはずの徳川御三卿の一つである清水家のお殿様が、たまたま野性味あふれる雷に惹かれたのはわかるとしても、山に入ってくる村人たちをいつも退散させ、父親の田中理右衛門（時任三郎）以外とは口もきいたことのない雷が、なぜ清水齊道（岡田将生）のようなのっぺらぼうなイマドキのイケメンに一目惚れしたの？

＜裏の世界の緊迫感は？＞

ロミオとジュリエットはモンタギュー家とキャピュレット家が敵対しているという前提でスタートするが、本作で敵対するのは瀬田村ともう1つの村。したがって、早い段階で理右衛門が生まれたばかりの瀬田村の庄屋の娘・遊を「さらって殺せ」とある組織から命じられるシーンが登場し、なるほどそういう村と村との争いが純愛の裏にあるんだということを示唆してくれる。したがって、本作のストーリー構成の軸となるキーマンは、雷を殺すはずだったのに逆に雷の育ての親となってしまう理右衛門だが、中盤はこの理右衛門の登場が全くなり、純愛モード一色になってしまう。

ラストには理右衛門が再登場して、田所文之進（池畑慎之介）率いる闇の勢力との「対決」に臨むわけだが、本作ではどうもこの裏の世界の緊迫感が弱いうえ、なぜそんな争いになっているのかの説得力が弱い。11月23日の延坪（ヨンピョン）島への北朝鮮による砲撃を受けて、いよいよ11月28日から黄海での米韓合同演習が始まったが、これに対する北朝鮮の対抗策は？そんな現実の緊迫感に比べると、本作のそれは・・・？

＜バカ殿のバカさ加減と決断力のなさに、うんざり・・・＞

幼児の時に受けた虐待体験がいつまでもトラウマとして残り、成人後の人格形成に影響を及ぼすことは今も昔も同じらしい。しかし、現在そんな病的人格をもったお殿様を頂いている清水家や家老の榎戸角之進（柄本明）は大変だ。齊道には気の利いたお側役が必要だとして榎戸が目をつけたのが、瀬田助次郎（小出恵介）。実はこの助次郎は、今は山の天狗として里人から恐れられている雷こと遊の実の兄。なぜ庄屋の二男坊がお城に入り、武士に？そこらあたりも多少不自然だが、それはさておき、この助次郎が齊道と雷の出会いの場を演出する役割を担うから、本作のストーリー形成の第2のキーマンがこの助次郎になる。

11月26日に参議院で仙石由人官房長官の問責決議案が可決されたが、11月27日菅直人総理は「支持率が1%になっても総理は辞めない」と発言。しかして、本作において一貫して示されるバカ殿様こと齊道のバカさ加減と決断力のなさは、まさに菅総理と瓜二つ？紀州家のお姫様との結婚を一旦決意しながら、雷と一夜を過ごす、「紀州に行くのはやめた！」と発言するに及んで御用人の榎戸が取った行動とは？今後菅直人総理はあくまで仙石官房長官と心中する途を選ぶのか、それとも、あのうつろな目で周りをキョロキョロ見渡してから、結局「仙石切り！」に走るのかが注目されるが、私の予測では後者の可能性が大。そんな時、さて仙石官房長官は榎戸と同じように、バカ殿をお諫めすることができるのだろうか？

＜ラストの設定の賛否は？18年後は余分では？＞

本作のクライマックスに向けてのキーワードは「かどわかし」。物騒なこの言葉は本来悪い意味で使われるが、齊道と雷の間で交わされる本作におけるこの言葉はあくまで前向きなもの。つまり、本気で2人で生きようというのなら、雷は「私をかどわかしてくれ」と叫ぶのだが、それに対する齊道の答えは「無茶をいうな」といういかにも中途半端なものだった。それに対して雷は、「それなら、オレがお前をかどわかしてやる」と宣言するのだが、かつて菅直人政権がキャッチフレーズにしていた、その「有言実行」ぶりは？

このハイライトシーンはかなり迫力があるから、本作最大の見どころ。しかして、本作はどんな結末で終わらせるの？そう思っていると、いきなり18年後が登場してきたからビックリ！ストーリー形成のキーマンが榎戸と助次郎なら、ストーリー形成の小道具は齊道が雷にプレゼントした木製のくし。一度壊されてしまったこのくしは、雷の母親・たえ（宮崎美子）の心遣いによって修理され、再び雷が使用していたが、ある時これが齊道の手に入。しかして、映画はこれをラストにも活用するのだが、その賛否は？

また、たった一夜一度限りの契りでも妊娠することは可能だから、映画ではよくそういうパターンが登場する。しかして、本作でもひょっとして？そう思っていると、案の定・・・。18年後と言えば、もし息子が生まれていれば18歳。そして、それはDNA鑑定をやらなくても齊道の子供であることまちがいなしだから、ストーリーの展開如何によっては、彼は清水家もしくは紀州家の跡継ぎにも・・・？しかし2時間を既に経過した今、そんな設定はムリ？

それにしても、雷が乗っていたカッコいい白馬は本作のポスターには絶好だが、そもそも馬の寿命は普通約25年。まれに40年を超えることもあるらしいが、雷の子供が18歳になった今、あの白馬の雄姿でラストを飾るのはちょっと無理筋では？